

る平面の小石なき所にうすき藁筵を敷、夫に入、一ならびに重ならぬやうして干べし此干筵厚  
きは梅に色付す、薄筵は地氣を通す故歟、色ほんのりと赤みさして艶よし、能天氣ならば二日程  
にて宜しけれども、日勢ぬるきの時は三四日も干べし、扱其干揚たるを、すぐに樽に詰、四方に細  
繩をかけ、諸方へ送るべし、又小田原名物の紫蘇卷梅は、右の如く青漬にしたるを、紫蘇にて卷  
也、扱紫蘇の仕立やうは、丸葉の兩面を蒔育べし、縮面は惡し、七月益後頃能成長したるを、それをこ  
きあげ、葉をむしりて重ね、鹽押にして、十日計置、葉の和らかなる頃、右青鹽漬の梅の水を玄たみ  
捨、紫蘇の葉一枚づゝを卷て、先ぐりに、壺か、桶に詰べし、然して一ヶ月程置ば、青漬の梅十分紫蘇  
汁に漬たる如く見事に染る也、小田原漬は決して紫蘇汁につくる事なし、是名物也、爰に江戸戸  
本庄龜井戸に梅屋敷とて有、此所の梅は地をはひて龍の形ちあれば、臥龍梅とて一種の名木也、  
寛政文化の頃東都に誹諧を樂む一老人あり、隅田川の邊りに地面を求め草庵をむすび、其四方  
に梅の木の一尺廻りにもあまれるを、三百六十本調へ植置けるに、新梅屋敷と稱し、春は男女  
群集せり、其老人予永大に語りて曰、吾風流に梅を植しにあらず、壹本の木に梅の生る事銀四匁  
ならしにはあるべし、吾が一日の暮し方銀四匁にて足りざるに依て一年の日數に植たりとな  
ん、梅も能作れば壹本にて錢貳貫文位取上るもの也、依て梅を植、右記す如く梅干として都會に  
出しひさぐべし、又我住る屋敷内に無用の樹を植んより、五六本づゝにても植置なば、五六人暮  
しの鹽代は取もの也。

〔草木六部耕種法十九需實〕梅ハ花ヲ賞玩スルコト極テ篤シ、其事需花編ニ既ニ詳セリ、實ヲ需テ此物ヲ  
作ニバ、接木スルヲ良トス、核栽ヲ成長セシメタルハ、實結コトノ遲ノミナラズ、其實肉ノ肥、大ナ  
ラザルコト多シ、宜ク先其核ヲ栽テ苗ヲ爲立テ、苗一尺以上ニ及ビタルヲ、植地ニ移植エ、培養シ  
テ早ク成長セシメ、其幹笛竹フユタケノ太ニ至リ、乃チ伐テ砧木ト爲シ、極良ナル梅ヲ撰ビ、其ノ梢ヲ接木